

令和5年度 学校評価シート

学校名： 県立日高高等学校附属中学校 校長名： 山本直樹

目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

- 志学・創造・敬愛を教育理念とする
- 総合的で豊かな人間力を備え、社会に貢献できる優れた人材へと育つ生徒

学校評価の公表方法

生徒アンケートと保護者アンケートを実施し、学校運営協議会・保護者会や学年別懇談会において、さらに学年通信では書面において自己評価表及び学校関係者評価結果を知らせる。加えて本校ホームページにおいても評価結果を公開している。

現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
	B	概ね達成している。（60%以上）
	C	あまり十分でない。（40%以上）
	D	不十分である。（40%未満）

自己評価（分析、計画、取組、評価）

番号	計画・取組				評価（3月18日現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	充実した学習【基礎学力の定着】と確かな学力の育成【判断力と表現力向上】を図る	B	(1) 発展的な学習や基礎・基本補習学習の充実と個別指導	個人支援や基礎学力補習を計画的、かつ継続的に実施できたか。	A	個人指導や学習支援、学力補習を継続的に行うことができた。	大半の生徒は自らが計画を立て、勉学に励むことができる。しかし、課題への取組みに対して受け身な生徒が存在することも事実である。今後は、さらに個々の自主性を高め、目標を明確にした上での個人的学習の定着を図りたいと考えている。
			(2) ICTを効果的に活用し、思考力・判断力・表現力を向上させる授業改善・授業展開	担任・教科担当が課題達成率100%を目指し取り組めたか。	B	担当者の日頃からの指導により課題達成率は高めることができた。	
			(3) 検定受検を奨励し、取得に向けた支援指導の実施	卒業時に英検準2取得率80%、漢検準2取得率60%を達成できたか。	C	取得率については、英検47.5%・漢検15%である。奨励する際の言葉掛けに関しては、さらに意欲を持たせる工夫が必要である。	
2	豊かな人間性を育成するため、社会性・道徳性・協働をテーマにした授業作り	A	(1) 広い視野と考察力を育む教材内容精査に努める	全教員が年に1度研究授業を実施し、教員間での指導力を高めあうことができたか。	A	参観は当然であるが、指導案の検討会と協議での話し合いや質疑応答の時間がたいへん有意義であり、指導者としての自身を高め合える機会になっていることが素晴らしい。	豊かな人間性を育成するための授業作りを実践し、社会性・道徳性・協働をテーマにした内容の深い学びを実現するための指導法について磨きをかける努力を継続することができた。さらに、教員間での相乗効果がうまれよりよい活動が実践され、生徒たちの考察力や表現力を高める一助となった。
			(2) ペアやグループでの話し合いを基に、他者との協働から相手を尊重することを学ぶ環境設定	教材研究や打ち合わせの時間を十分に確保し、質の高い授業内容を提供できるよう勤務状況を管理することができたか。	A	教科会議や教科での打ち合わせの時間を持つことで、授業内容や教材について議論する時間が持てるよう、勤務状況を管理することができた。	
			(3) 継続的に地域と連携した授業の取り組み	地域連携学習の計画・実施において、生徒の充実感90%以上にできたか。	B	各学年において魅力ある地域連携学習を実施し、86.9%の生徒が魅力ある学習であると感じている。	
3	学校設定教科「日高シナジー」の充実とICT活用の学力支援と取り組みの改善	A	(1) 実験科学では、科学的に追及する力と課題解決力向上の取り組み	思考の過程を大切にしよう指導することができたか。	A	91.3%の生徒が個人やグループで科学的に考えることができた実感している。	学校設定教科「日高シナジー」3教科については、内容を充実させると共に、個々の能力や協働性を高める取組を実践することができた。加えて、ICT活用の学力支援についても情報モラルを意識しながら使用方法等についても適切に指導することができた。
			(2) コミュニケーションでは、言語感覚を磨き、表現力を高める活動	発表において自らの言葉でアウトプットさせることができたか。	B	84.3%の生徒が自分の考えや情報を英語で伝えることができた実感している。	
			(3) 情報科学では、ICTを活用しての情報収集力・視覚材料作成力の向上	効果的に取り入れるため、全職員が研修等に参加ならびに現職教育での共有を図り、個々の活用術を高めることができたか。	A	92.5%の第3学年生徒がICT機器の活用の仕方や情報モラルについて理解することができた実感している。	
4	教育相談を充実させ、個々に応じた指導を適切に取り組む	A	(1) 部会やケース会議・職員間での事実と対応確認および未然防止対策としての関係づくり	迅速に対応できるよう、日々生徒の変化に敏感になり、全体で動きを把握できていたか。	A	迅速に対応できるよう、全職員で対応や動きについて把握実践することができた。	いちばん大切にしたのは、毎日実践した職員間での“生徒の様子”の情報共有である。そこから段階的に教育相談を充実させ、個々に応じた指導を適切に取り組むことができた。さらに、SC・SSWとの連携を密に行い、少しの気づきを漏らすことなく、生徒たちの安心感や充実感に応える指導や見守りを継続的に行うことができた。
			(2) 生徒の状況把握（いじめアンケート・面談・観察）	①学期に1回いじめアンケートを実施できたか。 ②いじめ解消率100%を達成できたか。	A	いじめアンケートを毎学期実施し、加えて日々の学校生活のなかでの生徒指導を密にすることで対応を丁寧に行ってきた。	
			(3) SC・SSW・地域関係機関との連携	情報共有を密に、対策について話し合いができたか。	A	生徒や保護者による個人面談を含め、教育相談部会やケース会議において、的確な助言をいただき職員間においても密に共有することができた。	

学校関係者評価（2月9日実施）

令和5年度は計3回の学校運営協議会が開催され、授業参観や教頭からの説明を通して、本校教育についての助言や意見をいただく機会となった。

ある委員の方が、日高川町にある天文公園の利用の仕方についてのアンケートが子育て世代の方々に配布されていたことを評価してくださり、第2学年の総合的な学習の時間での取組の一環として行政にも関わっていただき、中間発表も参観いただき助言をいただくなど、天文公園の取組以外にも過疎化での移動販売への提案なども行ったことを報告した。

年度末の学校評価シートにおいて、「全日制そして中学校の取組や成果が地域から十分に理解されていると思いますか」の評価がb（どちらかといえばそう思う）とc（どちらかといえばそう思わない）が多く、運営協議会内でも話題に上がることが多かった。ホームページへの掲載や、地元新聞での掲載、小学生への学校通信の配布などが主流になっているのだが、さらなる情報提供の方法を模索し続けているところである。

2月2日から9日にかけて実施期間とした保護者アンケートでは、83.2%の保護者が本校の教育方針をよく理解していることが分かった。また、各種通信より学校の様子を知ることができると答えたのは、87.7%の保護者であった。